

さるかに合戦 鳥取県

昔むかしのそのむかし。

ある朝、かにが川へ顔を洗いに行って、かきの種たねをひとつひろいました。かには、かきの種を家に持つてかえつて、畠にまいて、毎朝毎朝、「生えねば、はさもう。生えねば、はさもう」といいました。

ある朝、かにが畠に行つてみるとかきの種が芽めを出していました。そこで、こんどは、「大きいならねば、はさもう。大きいならねば、はさもう」といいました。すると、かきの木は大きくなりました。けれどもなかなか実がならないので、かには、

「ならねばは、さもう。ならねば、はさもう」といいました。するとかきの実がいっぱいなりました。そこで、こんどは、

「熟うれねば、はさもう。熟れねば、はさもう」といいました。かきの実は真っ赤に熟れました。

ところが、かには木に登れません。かにが、下からかきの実を見上げていると、さるがやって来ました。そこで、かには、

「さるどん、さるどん。あのかきの実をひとつ取ってくれないか」とたのみました。さるは、

「ああ、取つてやるぞ」といつて、木に登つていきました。けれども自分ばかり、取つては食い、取つては食いして、かにはひとつもくれません。

「さるどん、さるどん。おれにもひとつ落しておくれ」と、かにがいふと、さるは、「ああ、わすれていた。それ、ほい」といつて、まだ青いかきの実を取つて、かにめがけて投げつけました。かきの実はかににぶつかり、こうらが割れて、かには死んでしまいました。

すると、こうらの中から、子がにが、ぐやぐや生まれてきました。
やがて、子がにたちは大きくなると、

「どうしておれたちには母さんがいないんだ」といいました。そして、さるがかきの実を投げつけた話を聞くと、

「さるが母さんを殺したんなら、かたきを討うたなくちやならない」といいました。そして、

子がにたちみんなで、さるが島へかたき討ちに出かけました。

子がにたちが進んでいくと、くされなわが飛んできて、

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」ととききました。かにが、

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」と答えると、くされなわは、

「それなら、おれも連れていくてくれ」といって、ついてきました。

しばらく行くと、うすがころころ飛んできました。

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」

「それなら、おれも連れていくてくれ」といって、牛のくそもついてきました。

しばらく行くと、牛のくそが飛んできました。

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」

「それなら、おれも連れていくてくれ」といって、牛のくそもついてきました。

「そこへはちが飛んできました。

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」

「それなら、おれも連れていくてくれ」

するとこんどは、丹波ぐり^{たんば}が飛んできました。

「かにどん、かにどん。どこへ行くんだ」

「さるが島へかたき討ちに行くんだ」

「それなら、おれも連れていくてくれ」

こうして、くされなわと、うすと、牛のくそと、はちと、丹波ぐりがせいぞろいして、

かには元気を出して進んでいきました。ガサガサ、ドウドウ、ジャクヤ、ジャクヤとみんなで歩いていました。

いよいよさるが島のさるの家に着きました。家中をのぞいたら、うまいぐあいに、さるはむこうを向いて、いろいろで背^せあぶりしていました。

そこで、かにがみんなにいいました。

「丹波ぐりどん、おまえはいろいろの中に入つてはじけてくれ。さるが熱い灰をかぶつて飛

んできたら、わしらは水がめにかくれていて、はさみで切ってやる。はちどんはみそ桶の
中にかくれていて、さるが飛んできたらさしてくれ。牛のくそどんは、戸口にすわって、
さるがすべりこけるように待つてくれ。くされなわどんは戸口の上でうすどんをつり
さげて待つてくれ。そして、さるがすべりこけたらうぶしてやれ」

みんなはそれぞれの持ち場に着きました。

しばらくすると、いきなり、丹波ぐりがはじけて、さるに熱い灰をぶっかけました。さ
るは飛びあがって水おけの所へ走つていきました。すると水おけからかにがいっぱい出て
きて、ぐつしゃーんとさるに切りつけました。

「これはかなわん」さるは、みそ桶のところへ飛んでいきました。するとみそ桶からはち
が飛んででて、さるをぐきやぎやぎやーんとさしました。

「これはかなわん」さるは、家から飛びだしました。ところが、戸口のところで牛のくそ
をふんづけて、仰向あおむけにすべりこけてしましました。そこへ、くされなわが切れて、うす
が落ちてきてさるの上に乗つかり、さるは死んでしました。

こうして、かには、親のかたきを討つたということです。

おしまい

村上郁再話

資料『大山北麓の昔話』稻田浩一・福田晃編／三弥井書店